

共同研究総括責任者



どこに処理施設を設置するのが妥当かの調査だけではなく、発生するごみをどうするのかを、みんなで考えてもらうことも任務の一つだと考えています。

宇都宮大学 北島 滋 副学長

研究内容 ~安全施設と便益性をもとめて~

1. 自然条件からの評価手法
2. ポジティブ評価による絞り込み
3. 住民との関わり方の評価項目

ポジティブ評価とは…（宇都宮大学教育学部 陣内雄次助教授）

リサイクル、リデュース(ごみの発生抑制)、リユース(再利用)、などによって、ごみゼロに近づけてゆくことが望ましいのですが、そのためには、相当な年月が必要となることが予測されます。

当然、塩谷広域圏内でもごみ処理は現実の問題として、長らくついてまわることだと思います。

そうであるならば、ごみ処理を適正に行い周辺地域に迷惑をかけない、つまり圏域内で発生するごみや処理後の廃棄物を圏域外へ持ち出すべきではないのです。したがってごみ処理施設は必然的に、圏域内に立地することとなります。

生活に密接に関連する施設であるならば、「迷惑」施設としてではなく、生活を維持するために必要な「地域融和型の社会基盤施設」と位置付け、その利点を積極的に取り上げ、生活に融合できるような活用の方向性を基本に評価すべきである、というのがポジティブ評価の基本的考え方です。

「ごみ問題」
みんなで考えよう

